

桜蔭俳話会 一月句会(第二八三回) 於桜蔭会館

平成二十二年一月二十四日

- 2点①リズムある包丁の音や初詣 眞三
2点 寒に入る犬も帽子を被りけり 秀一
火柱立ち古老音頭のどんど焼 幸
双六も歌留多も縁なく遊ぶ子等 溪水
冬麗の富士と正面海葬す 幸
初詣盲導犬のあとにつく 守
パソコンのパソコンによる賀状かな 溪水
薄氷や名札ばかりの植物園 秀一
1点①園庭の砂の乾きし喧嘩独楽 守
日脚伸ぶ小人蟄居の小窓かな 秀一
寒ゆうべ何悲しくて赤子泣く 守
待春やたんぽぽ組の参観日 守
1点 丸幡と二重廻しの後姿 幸
初暦先づ通院日入れにけり 与史
また一人マスクの人に御辞儀され 与史
悴みの手にあるチラシすぐに捨つ 守
安房上総貝晴らす丘や風いくつ 与史
※ 小正月小言は明日に回しけり 秀一
七日はやびざの出前に赤ワイン 与史
遊女墓訪ふ人ありや霜柱 幸
湧水の輪の拡がりや浮寝鳥 溪水
低き枝選びからすの御慶かな 秀一
どんど焼テレビのシヨ一によみがへる 与史
初みくじ中吉なれば心する 眞三
初日記気も新らたなる計を記す 眞三

不在投句 (瀬戸 溪水)

一月句報の書評は、増田先生の都合に依り
省略させて頂きました。